

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担研究報告書）

診断されて間もない人への情報提供資材の評価と活用に関する研究（全体）

研究代表者 高山 智子 国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部（部長）

研究協力者 齋藤 弓子 国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部（特任研究員）

研究要旨

本研究では、がんと診断されて間もない人への情報提供のために作成された資材である冊子を、適切な時期に対象となるがん患者とその家族へ届けるため、冊子の利用意向や冊子の具体的な活用方法と今後の課題等について、がん診療に携わる医師とがん相談支援センターのがん専門相談員の視点を通じて検討することを目的とした。

本研究を進めるにあたり、研究Ⅰ．医師を対象とした調査と研究Ⅱ．がん相談支援センターを対象とした調査の企画を行った。研究Ⅰでは、医師を対象に、冊子作成の経緯や活用方法についてのオンライン説明会を開催し、説明会前後2回の冊子に記載されているがん相談支援センターの認知度や冊子の利用意向について評価するWebアンケートを実施した。また配布を実施した医師にインタビュー調査を実施することとした。研究Ⅱでは、がん専門相談員（以下、相談員）を中心とする担当者へ院内での冊子の配布方法についての検討を依頼し、次年度夏頃に、各施設での具体的な取り組みを把握するため、Webアンケートを実施することとした。本稿では、医師を対象とした調査（研究Ⅰ）でのオンライン説明会およびWebアンケートの結果と、がん相談支援センターを対象とした調査（研究Ⅱ）の進捗状況について報告する。

医師を対象とした調査（研究Ⅰ）でのオンライン説明会へは53名の参加があり、冊子の活用に関向き且つ好意的な意見が聞かれた。アンケートの結果、相談支援センターに対する利用意向は概ね高く、冊子を手渡すことで医師・患者間の関係性や患者からの信頼度も大きくなると評価された。一方、がん相談支援センターを対象とした調査（研究Ⅱ）では、冊子を配布する医師の理解や協力が得られなければ、院内での活用は難しいといった意見が寄せられた。冊子を適切な時期に対象となるがん患者とその家族へ届けるためには、医師の理解や協力を得ることが不可欠であり、そのための方策について検討していく必要性が示された。

A. 研究目的

がん診療連携拠点病院においては、がん患者およびその家族に対して、外来初診時に主治医から相談支援センターについて説明する等、診断初期の段階からがん相談支援センターの周知を図る体制を整備することが、がん診療連携拠点病院の整備について（以下、整備指針とする）で求められている¹⁾。また主治医には十分な時間をかけたインフォームド・コンセント、セカンドオピニオンや意思決定に必要な支援を行う等、病初期から治療終了まで、患者と十分にコミュニケーションを取り、患者の意思を尊重することが求められる²⁾。しかし、がん相談支援センターを利用したことがある人の割合は、2015年実施の患者体験調査では、約7%³⁾、2018年実施の患者体験調査でも約14%と低い状況が続いており⁴⁾、またがん

相談支援センターを知っている人も、がん相談支援センターが必ず設置されている拠点病院であるにも関わらず約6割という状況であることが示された。さらにがんと診断された初期から患者への説明が求められるセカンドオピニオンや妊孕性、就労継続などに関する医師からの情報提供やコミュニケーションも十分でないとする報告もある。このような状況をふまえ、都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会情報提供・相談支援部会とがん情報サービスが共同し、診断後間もない人に必要な情報を届け、主治医や医療者とのコミュニケーションの手掛かりとなることを目指し、国立がん研究センターがん編集委員会と都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会情報提供・相談支援部会との共同で、「診断後間もない人への情報提供資材」を作成することとなり、2022年2

月に完成した（冊子：資料1）。

本研究では、がんと診断されて間もない人への情報提供のために作成された資料である冊子を、適切な時期に対象となるがん患者とその家族へ届けるため、冊子の利用意向や冊子の具体的な活用方法と今後の課題等について、がん診療に携わる医師とがん相談支援センターのがん専門相談員の視点を通じて検討することを目的とした。

B. 研究方法

本研究では、2つの調査研究を計画・実施した（図1）。

研究Ⅰ. 医師を対象とした調査

医師を対象に、冊子作成の経緯や活用方法についてのオンライン説明会を企画・開催する。さらに、説明会前後2回のWebアンケートを実施し、冊子に記載されているがん相談支援センターの認知度や冊子の利用意向について測定し、評価する。

次年度に、実際の使用状況を把握するため個別インタビューを実施する予定である。

研究Ⅱ. がん相談支援センターを対象とした調査

がん相談支援センターを対象とした調査では、がん専門相談員（以下、相談員）を中心とする担当者へ院内での冊子の配布方法についての検討を依頼する。

本年度末に参加協力施設を募り、次年度夏頃に、各施設での具体的な取り組みを把握するため、Webアンケートを実施する予定である。

本稿では、医師を対象とした調査（研究Ⅰ）でのオンライン説明会およびWebアンケートの結果と、がん相談支援センターを対象とした調査（研究Ⅱ）の進捗状況について報告する。

研究Ⅰ. 医師を対象とした調査

a. 対象者

冊子の活用に関する説明会であることを明示した上で、調査協力に同意が得られたがんの外来診療に携わる医師とした。適格基準と除外基準は以下のとおりである。

（適格基準）

- ・がんの外来診療に携わる医師（診療科は問わない）
- ・がんと診断した患者とその家族へ冊子を手渡すことができる医師
- ・アンケート回答やオンライン説明会参加のための安定したネットワーク接続環境、および静かな個室などの環境を準備できる者

（除外基準）

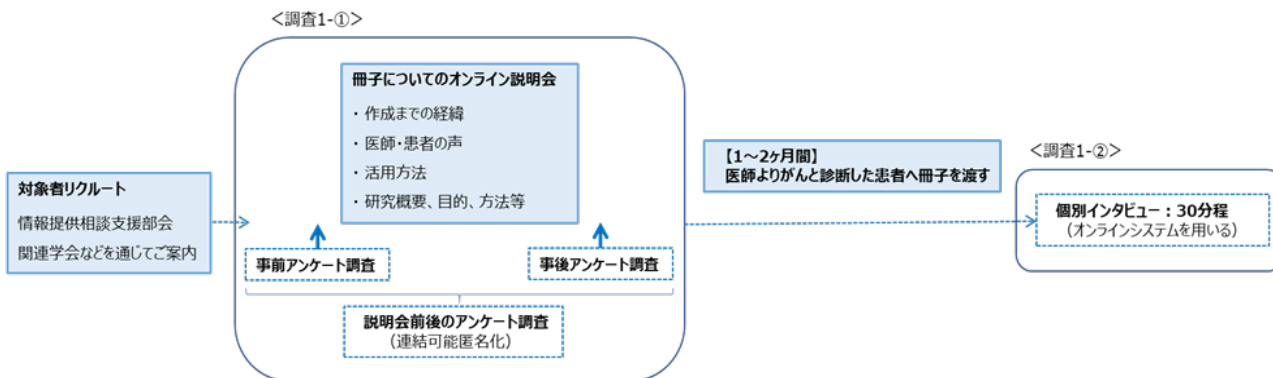
適格基準を満たさない者

b. 研究デザイン

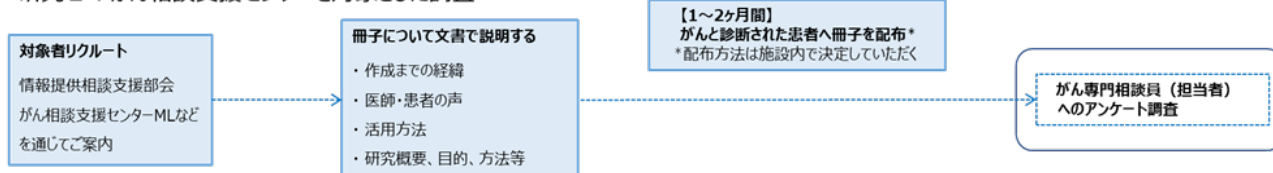
本研究は、連結可能匿名化による量的な観察研究と、インタビューによる質的記述的研究から成る。
※本稿では説明会とアンケートについて報告する。

図1 研究の全体像

研究Ⅰ：医師個人を対象とした調査



研究Ⅱ：がん相談支援センターを対象とした調査



c. 調査手順

具体的な調査手順は、以下の通りである。

- (ア) 全国のがん診療連携拠点病院のメーリングリストを通じて、がん診療に携わる医師へ調査を案内した。
- (イ) 本調査に関心がある場合、メールに記載されているURLの応募フォームへの登録を依頼した。
- (エ) 応募フォームより登録された対象者へは、冊子(10冊)を無料で郵送する。また、オンライン説明会の案内とアンケートフォームのURLはメールで送付し、それぞれ参加と回答を依頼した。
- (オ) 対象者へは、実際の診療時にごんと診断した患者や家族へ冊子を手渡してもらうよう依頼した。

d. 調査期間

アンケート実施期間は2022年3月1日～3月31日であった。

【冊子に関するオンライン説明会】

開催日時：2022年3月10日(木) 18:00～18:30

開催内容/タイムスケジュール(当日スライド/資料2)

18:00 説明会開始

18:00～18:05 ご挨拶・冊子作成の背景

高山 智子(国立がん研究センターがん対策研究所
がん情報提供部 部長)

18:05～18:20 冊子作成経緯と医師による配布の
意義について

山内 智香子 先生(滋賀県立総合病院
医師/滋賀県相談支援部会長)

18:25～18:30 質疑応答

18:30 説明会終了

※この説明会は録画し、アーカイブ配信した。

<https://doctor21.wksp.net/info/>

c. アンケート調査の内容

【事前・事後調査：共通項目】

- ・ 個人属性(年代、性別、職位、臨床経験年数など)
 - ・ 施設特性(病院の種類など)
 - ・ がん診療の対応状況
 - ・ がん相談支援センターの認知度・役割の認識・実際の利用など
- 以下の①～⑪について
- ① その病院にかかっているなくても利用できるがんの相談窓口である
 - ② 患者だけでなく、家族や友人など誰でも利用できる
 - ③ 安心して利用できるよう相談者の相談内容を、本人

の了解なしに主治医をはじめ他の人に伝えることはない

- ④ 相談者(患者や家族など)の不安などの心理的な支援を行う
- ⑤ 相談者が医師の話が十分にわからなかったときの理解を助ける/医師が行った説明の補完をする
- ⑥ 相談者に必要な情報や支援を探す手伝いをする
- ⑦ 相談者の医療費や使える医療制度の説明をする
- ⑧ 相談者の悩みや困りごとに応じて、必要な支援やサービスを提案する
- ⑨ 相談者の悩みや困りごとに応じて、対応できる院内や院外の窓口へ橋渡しする
- ⑩ 転院先や退院後の療養先を探す
- ⑪ 相談者が医師に聞きたいことを相談者と一緒に整理する

・ 診断後間もない患者さんへの説明状況

以下の①～⑪について

- ① 他の医療機関のセカンドオピニオンを受けられることについて説明すること。
- ② 治療が始まる前に、妊孕性温存できるか否か、必要な対応について説明すること。
- ③ ごんと診断されても仕事を継続できることなど、就労について説明すること。
- ④ がん相談支援センターがあり、いつでも相談できることを説明すること。

【事後調査のみの項目】

・ 冊子活用に関する認識

以下の①～④についての評価

この冊子を手渡すことで、

- ① 医師の時間的な負担の度合い
- ② 医師の心理的な負担の度合い
- ③ 医師と患者との関係
- ④ 医師や医療チーム、医療機関に対する患者の信頼度

以下の①②についての今後の利用意向

- ① この冊子をご自身の診療で利用したい(患者に直接手渡したい)と思う
- ② この冊子の存在と利用の仕方を、他の医師に知らせたいと思う

d. 分析方法

対象者の特徴を把握するため、各項目についての記述統計を算出した。

研究Ⅱ. がん相談支援センターを対象とした調査

a. 対象者

全国のがん診療連携拠点病院のうち、研究協力に

同意が得られたがん診療連携拠点病院のがん相談支援センターとした。

b. 研究デザイン

本研究は、横断的観察研究である。

※先述の通り、本稿では調査の進捗状況について報告する。

c. 調査手順

具体的な調査手順は、以下の通りである。

- (ア) 全国のがん診療連携拠点病院のメーリングリストを通じて、がん相談支援センターの関係者に調査について案内した。
- (イ) 本調査に関心がある場合、メールに記載されているURLの応募フォームへの登録を依頼した。
- (エ) 応募フォームより登録された対象施設の担当者(主に、相談員)へ、冊子(100冊)を無料で郵送した。
- (オ) 担当の相談員へは、院内での冊子の配布方法についての検討を依頼した。

d. 調査期間

調査募集期間は2022年3月12日～3月31日であった。

(倫理面への配慮)

本研究は、個人情報収集しないため研究倫理審査には申請しないが、国立がん研究センター研究倫理審査委員会より「審査不要(通知番号:6000-048)」の判断を得て実施した。調査対象となる医師およびがん相談支援センターの相談員(研究Ⅰ・Ⅱ)へ、調査の応募フォーム上に本研究の目的・方法・倫理的配慮を記した説明文を提示し、文書をよく読み、調査協力を検討するよう依頼した。また、がん相談支援センターを対象とした調査(研究Ⅱ)では、施設管理者より調査協力に関する同意文書の提出をもって、本研究の対象施設として登録することとした。

C. 研究結果

研究Ⅰ. 医師を対象とした調査(資料3)

医師を対象としたオンライン説明会への参加者は53名であった。説明会に参加した医師からは「診療に役立つ情報資料であると思う」「患者さんやご家族に伝えたい内容がコンパクトにわかりやすくまとまっている」「(冊子の)普及に向けた取り組みを推進すべき」等の意見が聞かれた。

説明会前後のアンケート回答者は、事前調査(以下、

事前)44人、事後調査(以下、事後)28人であった。説明会を知ったきっかけは、「院内での一斉連絡メール」「院外の関係者ネットワークのメール」「同僚の医師からのメールや声かけ」が、それぞれ2～3割を占めた。所属の医療機関は、大学病院が52.3%、がん専門病院が29.5%、総合病院が18.2%であり、(国指定)都道府県がん診療連携拠点病院が大半であった(79.5%)。性別は男性が93.2%、年齢は40代～50代が約7割を占め、診療科の専門領域は外科系が43.2%、内科系が54.5%であった。施設もしくは部門管理者は約6割であり、臨床経験年数20年以上が7割であった。

また全ての回答者が、現在がんの診療に携わっており、(一月あたり)外来診療において治療を開始する前のがん患者さんがいるとし、がんと診断されて間もないがん患者さんや家族等と直接話すもしくは説明する機会があると回答した。

相談支援センターについては、所属先の相談支援センターの場所を「知っている」が93.2%、がん診療連携拠点病院内にある相談支援センターの対応内容を「知っている・利用したことがある」が86.4%であり、相談支援センターの具体的な役割・機能については、いずれの項目においても7割以上が認知されていた。実際に、患者さんや家族などへ案内する時などに利用したことがある機能は「相談者に必要な情報や支援を探す手伝いをする(事前 vs 事後:83.3% vs 85.0%)」「相談者の医療費や使える医療制度の説明をする(88.9% vs 100%)」「相談者の悩みや困りごとに応じて、必要な支援やサービスを提案する(83.3% vs 85.0%)」の利用割合が高かった。同様の項目について、今後「利用したい」とする割合が8～9割を占め、それらの利用意向は高かった。

診断後間もない患者さんへの説明状況のうち、「治療が始まる前に、妊孕性温存できるか否か、必要な対応について説明すること」は、ほとんどの患者に説明できていないと回答した者が半数近くであったが、その割合は事後調査で微減した(50.0% vs 42.9%)。

事後調査では、冊子に関する評価や今後の利用意向について尋ねた。医師が冊子を患者さんに直接手渡すことで生じ得る時間的な負担の度合いは「変わらない(53.6%)」「大きくなる(28.6%)」「小さくなる(14.3%)」であった。同様に、医師の心理的負担の度合いは「小さくなる(53.6%)」「変わらない(32.1%)」「大きくなる(10.7%)」であった。また、冊子を手渡すことで医師と患者との関係は良好になるが53.6%、医師や医療チーム・医療機関に対する患者の信頼度は大きくなるが78.6%であった。

研究Ⅱ. がん相談支援センターを対象とした調査

調査募集期間中、33施設より応募があった。応募があった施設の所在地は、宮城県(1)、埼玉県(1)、東京都(2)、神奈川県(2)、富山県(1)、福井県(1)、長野県(4)、岐阜県(1)、愛知県(3)、三重県(1)、大阪府(1)、兵庫県(1)、奈良県(1)、和歌山県(1)、岡山県(1)、広島県(3)、徳島県(1)、香川県(2)、愛媛県(1)、福岡県(3)、鹿児島県(1)であった。※()内、施設数

また調査に関する問い合わせの内容として、調査へは関心があるとしながらも、「冊子を配布する医師の理解や協力が得られなければ、院内での活用は難しい」といった意見が寄せられ、調査への参加を見合わせる施設もあった。

D. 考察

医師を対象とした調査では、オンライン説明会の参加者より冊子活用に前向き且つ好意的な意見が聞かれた。また、アンケートでも相談支援センターに対する利用意向は概ね高く、冊子を手渡すことで医師・患者間の関係性は良好となり、患者からの信頼度も大きくなると認識されていた。今回実施したオンライン説明会では、実際に冊子作成に関わった医師より作成経緯を説明し、手で冊子を確認しながらその説明を聞くことができるよう、冊子の事前配布などの対応をとった。説明会へは、本テーマに関心を持つ医師が多く参加したと推察されるが、実施の冊子を手にとって、同じ医師の立場から冊子に関する説明を聞く機会を設けたことは、効果的であったと評価できる。

一方、がん相談支援センターを対象とした調査(研究Ⅱ)では、冊子を配布する医師の理解や協力が得られなければ、院内での活用は難しいといった意見が寄せられた。冊子を適切な時期に対象となるがん患者とその家族へ届けるためには、医師の理解や協力を得ることが不可欠であり、そのための方策について検討していく必要性が示された。

今後は、医師を対象としたアンケート調査で得られたデータの詳細な分析とインタビュー調査により、医師の視点を通して、冊子の活用促進に向けた課題抽出する予定である。また、相談支援センターでの冊子活用に関する取り組みを把握するためのアンケート調査も企画しており、それらの結果を踏まえ、医師に対する働きかけなどについて検討を行い、診療時に冊子を手に取り活用できる環境を整備することが求められる。

E. 結論

がんと診断されて間もない人への情報提供のために作成された資材である冊子の利用意向や具体的な活用方法と今後の課題等を検討するため、がん診療に携わる医師とがん相談支援センターを対象とした調査を企画した。この冊子を適切な時期に対象となるがん患者とその家族へ届けるためには、医師の理解や協力を得ることが不可欠であり、そのための方策について検討していく必要性が示された。今後、医師を対象としたインタビューや相談支援センターを対象としたアンケートにより、外来診療や院内での活動において冊子を活用する当事者の視点や認識を把握する予定である。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3. その他 なし

がんと診断された あなたに 知ってほしいこと



がん相談支援センターが力になります

この冊子を手にとってくださり、ありがとうございます。
ここで紹介している「がん相談支援センター」は、あなたの治療だけでなく、生活全般についても、あなたによりよい、力になることのできる医療スタッフがいる場所です。どうぞ、がん相談支援センターをご利用ください。

がん相談支援センター



がんと診断されたあなたに知ってほしいこと
—がん相談支援センターが力になります
<目次>

<第1章>

がんと診断された
あなたへ、
不安を感じたときには …4

<第2章>

がん相談支援
センターって、
どんなところ? …8

<第3章>

情報を集めるときに
大切にしたいこと …12

<第4章>

あなたにとっての
「最適な治療」を医療
チームが支援します …18

<第5章>

あなたらしい生活を
続けるために …24

<あとがき> あなたとこれからも一緒に …30



がんと診断された あなたへ、 不安を感じたときには



「ある日いきなり『がん』と言われても……」
「ショックで先生の話がぜんぜん入ってこない」
「これから自分はどうなるんだろう？」
「誰に相談したらいいのだろう……」

1 不安・悲しみ・怒りなどの感情が わき起こることは自然な心の反応です

がんと診断されて、動揺するのも無理はありません。
「頭が真っ白になって、記憶がほとんどない」
「いろいろ決めなくてはいけないのに、何も考えられない」

徐々に悲しみや不安が押し寄せてくるかもしれません。
「なぜわたしだけ苦しい思いをしなくてはいけないのか……」
「まさかわたしが……がんであるはずがない」

気持ちが不安定になったり、やり場のない思いがあらわれ
たりすることは、事実を一度に受け止められないときに起
こる、自然な心の反応です。

2 今の気持ちを 誰かに話してみませんか

不安や落ち込みを「ひとりで解決しなくて」と我慢して
しまう方もいるかもしれませんが、今の気持ちを誰かに伝え
ることで不安や落ち込みがやわらぐこともあります。

あなたのまわりにいる家族や信頼できる友人、そしてあな
たの近くにいる医師や医療スタッフに話してみませんか。

3 思いをうまく伝えられない ときには

どう伝えたらよいかわからないという方もいると思います。

また、それどころではなく、「不安で不安ではない」「何も考えられない」という方も多いのではないのでしょうか。

そんなときは、ぜひ「がん相談支援センター」[次章で説明
します]をご利用ください。相談員があなたの今の気持ちに
よりそいながら、これからどうしていくのかを考えるお手伝
いをします。



がん相談支援センターでお話してみませんか？

がん情報サービス がん相談支援センターとは



がん相談支援センターの利用者から

「何を相談していいかわからないし、最初はとてもためら
いました。でもそのまま帰りたくなくて……。がんの冊子
を読んだり、相談員さんと話をしたりして、少し気持ちが
楽になりました。勇気を出して行ってよかったです」



〈第1章 まとめ〉

- ・心のつらさや、どうしたらいいかわからないという思いを、
どうかひとりで抱え込まないでください。
- ・家族や友人、まわりにいる医師や医療スタッフ、そして、
がん相談支援センターの相談員が、あなたによりそいます。

がん相談支援センター って、どんなところ？



「先生に聞きたかったことが聞けなかった……」
「ただただ不安で、何を相談していいかもわからない」
「治療が始まっていないけど、相談できるの？」
「治療について、わかりやすく説明してほしい」
「仕事のこと、お金のこと、家族のこと、すべてが不安……」

1 全国にある、 がんに関する相談窓口です



「がん相談支援センター^{*1}」は、どこにお住まいでも質の高いがんの医療が受けられるように、厚生労働大臣が指定した「がん診療連携拠点病院^{*2}」などに設置されています。がん相談支援センターには次のような特長があります。

- ・ご本人やご家族はもちろん、どなたでも無料で相談できます。
- ・がん相談支援センターがある病院に通ってなくても相談できます。
- ・看護師、ソーシャルワーカー、心理士などが相談員として対応しています。
- ・窓口での対面だけでなく、電話でも相談できます。
- ・匿名でも相談できます。

相談内容を、本人の了解なしに主治医をはじめ他の人に伝えることは決してありませんので、安心してご相談ください。

*1 がん相談支援センターについて、「より詳しく知りたい」という方は、



*2 がん診療連携拠点病院やがん相談支援センターを探したい方は、



2 どんな小さなことでも相談できます

「こんなことを聞いてもよいのだろうか……」と思うようなことが、治療や生活、仕事の継続などを考える上で、実は重要なことだったりします。最初はぼんやりとした不安や疑問でも、話をすることで問題が明確になったり、あなたが何を大切にしたいのかということに気付いたりします。

がん相談支援センターでは、診察中に理解できなかったことや聞きにくかったこと、診察後に気になってしまったことなど、どんなことでも相談することができます。また、あなたに必要な情報を相談員と一緒に探すことができます。がんの冊子なども閲覧・入手することもできます。

3 どんなタイミングでも相談できます

がんと診断されて間もない時期は、治療のことや、医療費・生活費などの経済的なこと、仕事、家事・育児をどうするかなど、いろいろなことを決めなくてはなりません。そうはいつても、なかなか決められないことや今は考えられないということもあるかもしれません。がん相談支援センターではそのままのあなたとお話したいと思っています。

治療中も、そして治療後も悩むことがあるかもしれません。どんな時期でも、がん相談支援センターはあなたによりそい、一緒に考えていきます。

がん相談支援センターの利用者から

「先生からはこの治療しかないと言われたのですが、よく理解できないところもあったし、もっとほかにもいい治療があるんじゃないかなって思っていました。どうしても気になって相談員さんに聞いて話していたら、先生が説明したかったことが何となくわかってきました。今度受診したときには先生の話であらためてよく聞いて、これからのことを一緒に考えたいと思います」



〈第2章 まとめ〉

- ・がん相談支援センターでは誰でも無料で相談できます。
- ・相談員はあなたに必要な情報を探してお手伝いをします。



情報を集めるときに 大切にしたいこと



「がんのことは、どのように調べればいいの？」

「わたしに必要な情報って、何だろう」

「テレビで見た最先端医療が気になる……」

「インターネットで検索すると、いろんな情報があって混乱する」

1 主治医は、一番大切な、 あなたの情報源

主治医は、あなたの診断や治療に関してもっとも重要な情報源になります。あなたにとって、今、どのように対応するのが医学的に一番良いか、医学の専門家として責任を持って提案します。

まずは主治医の説明をよく聞きましょう。そして、知りたいことは遠慮せずに聞いてみましょう。

とくに確認したいのは、「正確ながんの名前」「そのがんの詳しい性質」「がんの広がり（病期／ステージ）」です。

主治医と話すときには、



①あとから見直せるようにメモをとりましょう

専用のノートを作り、日付を入れて順番に書くといいでしょう。家族や信頼できる人に同席してもらうのもよい方法です。また、会話を録音できることもあります。施設によっては禁止されているところもありますので、録音したいときには「録音してもよいですか?」と聞いてみましょう。

②質問リストをまとめておきましょう

質問したいことを忘れないように準備しておくくと便利です。がん相談支援センターと一緒に考えてもらうこともできます。主治医にリストを渡して、読んでもらうのもよいでしょう。



2 国立がん研究センター 「がん情報サービス」が 検索の入り口

インターネット上には膨大な情報があります。中には、すでに使われなくなった古い治療法、ある人にとっては当てはまるけれど今のあなたには当てはまらないもの、効果が科学的に確認されていないものを、保険外で患者負担が高額となる自由診療として提供しているもの、なども数多く存在します。自分に合った確かな情報を、見つけ出すことは非常に難しいかもしれません。

まずは「がん情報サービス」を検索してください

インターネットで情報を探すときには、「確かな」入り口から入ることが大切です。その代表として国立がん研究センターが運営するウェブサイト「がん情報サービス」がおすすめです。



* がん情報サービス

主にがんと診断されたばかりの方に向けて、がんの種類ごとの情報、検査や治療、療養、病院、制度に関する基本的な情報を、わかりやすくまとめたサイトです。

がん情報サービス



「がんの冊子」シリーズもあります

がん情報サービスでは「がんの冊子」も提供しています。

また、これらの冊子はがん相談支援センターで無料で手に入れることができます。



がん情報サービス がんの冊子



「地域のがん情報」はこちら

各都道府県の医療機関や行政によるサポートなどを含め、地域に密着した情報を確認することができます。

がん情報サービス 地域のがん情報



その情報は大丈夫ですか？ 読む前にチェック！

当てはまったら**要注意**です。

①情報が古くありませんか？

医療は日進月歩。現時点で最良の内容ではないかもしれません。

②保険診療で受けられない治療ではありませんか？

例えば、一部の民間のクリニックや病院において「自由診療として行われる免疫療法」は、効果が証明されておらず、医療として確立されていません。

③こんな言葉が入っていませんか？

「必ずよくなる」「〇〇すれば治る」「奇跡の」「特別な」「副作用がない」「どんながんにも効く」「がんが消えた」……
これらは宣伝文句として使われていることが大半です。

④「わたしはこれでがんが治った!」ブログや動画

ある人に効果があった治療法が、そのままあなたのがんにも効くわけではありません。

3 確かな情報源から 自分に合った情報を探ることが大切です

「がん情報サービス」など、確かな情報源からあなたに合った情報を見つけましょう。情報は、がんと診断されたあなたが、これからどうしたいかを考え、決めていくために使うものです。情報を探すときには、何をするために、どのようなことを知りたいのかを考えてみましょう。

気になる情報が見つかったら……
ひとりで判断しないことが大切です

その情報は確かな情報ですか？ 要注意な情報はありますか？

主治医や看護師、まわりにいる医療スタッフに相談してみましょう。

インターネット上の情報の場合は、見つけた情報を印刷して、確認してもらおうとよいでしょう。

がん相談支援センターでお話してみませんか？

がん情報サービス がん相談支援センターとは



がん相談支援センターの利用者から

「インターネットや本を調べてみたところ、医師から提案された治療以外に『遺伝子治療』や『免疫療法』、『がんに効く〇〇』など、たくさんの治療法であふれていました。何がよいことなのかわからなくなってしまい、がん相談支援センターで聞いてみました。標準治療と自由診療の違いなどについて教えていただき、混乱が解消されました。相談できてよかったです」



〈第3章 まとめ〉

- ・何が確かな情報かあなただけで判断せず、あなたにとって最善の方法と一緒に考えてくれる主治医やまわりの医療スタッフ、そして、がん相談支援センターに相談してください。
- ・確かな情報源として「がん情報サービス」を利用しましょう。

〈第4章〉

あなたにとっての 「最適な治療」を医療 チームが支援します



「どんな治療があるんだろう。入院になるのかな？」

「わたしにとって最適な治療は何だろう……」

「セカンドオピニオンって聞けるの？」

「副作用が心配。治療したらわたしの体は変わってしまう？」

「将来、子どもをもてるだろうか」

1 あなたの希望をふまえて、 「最適な治療」を一緒に見つけます

がんの治療法には、手術（外科治療）、薬物療法（抗がん剤治療など）、放射線治療などがあります。治療の期間や、入院するかどうかは、治療法やあなたの状況によって変わっていきます。

主治医はまず、がんの種類や進行の程度、体の状態などを検査でよく調べて、提案できる治療法の中から、あなたにとっての「最適な治療」を探ります。「最適な治療」の選択は、がん治療だけでなく、治療が始まってからの生活のことも含めて、あなたが何を大切にしたいかがポイントになります。

まずは、あなたの希望を主治医に伝えることが第一です。例えば、治療の中で何を大切にしたいですか？ 体への負担が少ないこと、時間、生活、仕事、将来のこと……。その上で、主治医を含めた医療チームがあなたの希望をふまえて、あなたにとっての「最適な治療」を一緒に考えます。

「標準治療」とは

科学的根拠に基づいた観点で、がんの種類ごとに現在利用できる最良の治療であることが示され、多くの患者に行われることが推奨される治療を「標準治療」といいます。新しい治療が標準治療になるためには、その効果や副作用などを調べる臨床試験によって、それまでの標準治療より優れていることが証明される必要があります。つまり、新しい治療というだけでは最良の治療とは限りません。

がん情報サービス 研究段階の医療（臨床試験、治験など） 基礎知識



2 セカンドオピニオンを聞くこともできます



現在の主治医とは別の医師に診断や治療の選択などについて求める「第2の意見」をセカンドオピニオンといいます。主治医が提示した以外にも治療方法がないか知りたいときや、主治医の意見を別の角度から検討したいときに利用することができます。

セカンドオピニオンを聞くことは、患者が納得して治療を受けるために行われるもので、病院を変えるためのものではありませんが、結果として病院を変えることもあります。

セカンドオピニオンを聞く希望があるときには、まずは医療スタッフに伝えましょう。医師に言い出しにくいと感じるときには、がん相談支援センターに相談してみましょう。

がん情報サービス セカンドオピニオン



3 がん治療の影響について聞いてみましょう

がん治療の影響は、副作用として全身や体の一部にあらわれたり、外見が変化したり、人によっては気持ちに影響することもあります。また、治療後すぐにあらわれることもあれば、時には数年から十数年たってからあらわれることもあります。

治療を始める前に、これから自分の体や心に起こりうることやその対処法を知っておくことは、あなたの助けになります。治療が終わってからの生活のことや気になることも、主治医や看護師など医療スタッフや、がん相談支援センターで話をしてみましょう。

がん情報サービス さまざまな症状への対応



治療を始める前に確認したいこと ～将来子どもを持ちたい方へ～

治療の前に、将来子どもを持ちたいか考えることも大切です。妊よう性は子どもをもうけるために必要な能力のことで、性別やがんの種類にかかわらず、がんの治療によって、妊よう性が弱くなったり、失ったりすることがあります。

最近では、将来自分の子どもを持つ可能性を残すための「妊よう性温存」が可能なることもあります。妊よう性温存のための治療は、がんの治療が始まる前に受ける必要がありますので、将来子どもを持つことを望むのかどうかについて、考えてみることも大切です。

がん情報サービス 妊よう性



4 あなたには、医療チームがついています

これから治療にのぞむあなたのことを、主治医を含め医療チームがサポートしていきます。

医療チームはあなたにとっての「最適な治療」を考えるときにも加わります。治療法が決まったあとも、あなたに起こりうるその影響を考え、治療が始まってからの生活もサポートします。いつでも声をかけてください。

医療チームは、外科、内科、緩和ケア科など、さまざまな診療科の医師、看護師、薬剤師、歯科医、心理士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、ソーシャルワーカー、ケアマネジャーなどから構成されます。



がん相談支援センターでお話してみませんか？

がん情報サービス がん相談支援センターとは



がん相談支援センターの利用者から

「手術を受けるか迷って相談しました。先生からは合併症について説明がありましたが、『お風呂に入れる？』『お酒は飲めるのか？』『旅行はできるのか？』など心配で頭がいっぱいでした。相談員さんが、先生からの説明を整理してくれて、また、他の患者さんがしている生活する上での工夫についても教えてくれました。術後の生活について具体的にイメージができ、手術を受ける決意ができました」



〈第4章 まとめ〉

- ・あなたの状況に合った最適な治療法を医療チームが一緒に考えます。
- ・主治医とは別の医師に第2の意見（セカンドオピニオン）を求めることもできます。
- ・治療による副作用の影響や対処法をあらかじめ知っておくことも大切です。

あなたらしい生活を 続けるために



「仕事を辞めないで治療できる？」

「親や子どもに何て言おう」

「身近に頼れる人がいない」

「治療費のことが心配」

「治療が終わっても気になることが出てきたらどうしよう」

1 治療しながら 仕事を続けることもできます

仕事をしている方は、がんと診断されて「仕事はもう続けられないのではないか」と退職を考えてしまうかもしれません。

まずは、今後の治療スケジュールと仕事を続けられるかの見通しを主治医に確認しましょう。

仕事を続けるのは大変なこともあるかもしれませんが、治療をしながら仕事を続ける方も増えています。経済的なことだけでなく社会とのつながりは大切なものです。大切な決断は急いでひとりで決めずに、職場でどのように伝えたらよいのか、何を確認すればよいのかなども含め、がん相談支援センターにご相談ください。

〈確認すること〉

①職場の就業規則と福利厚生制度

職場の総務課・人事課に確認できます。

②公的助成制度

職場の総務課・人事課のほか、がん相談支援センターや、病院のソーシャルワーカーにも相談できます。



がん情報サービス がんと仕事のQ&A



2 子どもや親にどう伝えるか

身近な人だからこそ、伝えることをためらうかもしれません。それでも、家族に病気のことを伝え、理解と協力を得ることがあなたにとってよいこともあります。自分が伝えたい内容や聞かれそうなことをメモにまとめておくとよいでしょう。がん相談支援センターで、どのように伝えたらよいのか一緒に考えることもできます。

子どもに自分の病気を伝える

お子さんに伝えることはとてもつらいことかもしれません。けれども、毎日一緒に生活していると、子どもは親の変化を敏感に感じ取り、心の距離が離れてしまうこともあります。「何というがんか」「がんはうつらない」「子どもや親が悪いわけではない」ことなどを伝えましょう。そして、これからの治療の見通し、生活の変化、助けてくれる人、協力してほしいことなど、お子さんの年齢や状況に応じて話しましょう。



親に自分の病気を伝える

親の年齢や健康状態によっては伝えることをためらうかもしれません。親が元気で頼れるようであれば、これからの治療の見通しを伝え、手伝ってもらいたいことや自分のかわりにお願いしたいことも一緒に伝えましょう。親の健康状態に不安があったり、十分な理解が難しかったりする場合には、伝えるか伝えないか、伝えるとしたらどこまで話すか、あらかじめ考えておくとういでしょう。

また、突然伝えるのではなく、まずは体調に不安があることを伝え、「あまりいい結果ではなかったので、今度詳しく話す」など、段階を踏むことで、親の心の準備ができる場合があります。

3 ひとり暮らしで心配なときに

ひとりで暮らしている方も、がんになると助けが必要になる場合があります。身内や身近に頼れる人がいないなど不安を感じる時やこれからの暮らしのことで困った場合には、がん相談支援センターをご利用ください。

4 お金のことで心配なときに

多くの方はがんの治療費について心配します。

病院の窓口では、自己負担限度額や、保険外になる食事、病衣、差額ベッド、診断書などの費用について聞くことができます。

がんと診断されてからの必要なお金の一部は公的医療保険などで負担が軽減できる場合があります。

また、就業や収入の状況に合わせた支援制度もあります。例えば、高額療養費制度を利用すると治療費の負担が軽くなるなど、治療前に知っておくとよい制度があります。

「どこに相談したらいいかわからない」というときには、まずは「がん相談支援センター」に相談することから始めましょう。また、各医療機関の相談窓口、ソーシャルワーカー、各自治体の相談窓口に尋ねてみることもできます。



5 気持ちの落ち込みが続く場合は

困難な状況に適應する力は、誰の心にも備わっています。けれども、個人差もあり、重い気持ちが長く続いてしまうこともあります。気持ちの落ち込みにより、眠れない、食べられないなどのつらい症状が2週間以上続く場合は、専門家による心のケアが必要かもしれません。できるだけ早く、医師や看護師、がん相談支援センターにご相談ください。

「ピアサポート」について

ピアサポートとは、同じ体験をした仲間（ピア）がお互いに助け合うことです。がんと診断された方でなければわからない気持ちや体験を共有することが、他では得られない支えとなることもあります。体験者の話は患者会やがんサロンなどで聞くことができますので、がん相談支援センターで聞いてみましょう。



がん相談支援センターでお話してみませんか？

がん情報サービス がん相談支援センターとは



がん相談支援センターの利用者から

「上司や同僚に伝えるタイミング、休む際の注意点などわからないことばかりで、がん相談支援センターに相談しました。医師や会社に確認するべきことを一緒に考えていただき何をしたらよいかわかりました。復職の際も相談したいです。仕事のことを病院で話せると思っていたなかったので、助かりました」



〈第5章 まとめ〉

- ・治療しながら仕事を続けることもできます。
- ・親や子どもにどう伝えるか、がん相談支援センターでは考えるお手伝いをします。
- ・頼れる人がいないこと、お金のことなど、心配なことがあればお気軽にがん相談支援センターをご利用ください。
- ・気持ちが晴れないときは、専門的な支援を受けましょう。

〈あとがき〉

あなたとこれからも一緒に

がんと診断されてからのあなたは、いろいろな場面で、大切な選択や決断を求められることが増えることでしょう。

「治療する、しない」「手術か、抗がん剤か」
「親に伝える？ 伝えない？」
「仕事を続ける？ 退職する？」 など

どれも今のあなたひとりで考えて決めるのには、とても大きな課題です。誰も、未知の経験や先の見えないことに対し、考え選択するのはとても難しいことで、その都度、迷い、悩むのは当然のことです。

そもそも、「まだ何も考えられない」という方も多くいらっしゃるはず。そのようなときは、あなたのかわりに、家族や信頼できる友人に、この冊子を読んでもらってください。

また、不安や迷いは、いつでも生じるものです。「困ったな」と感じたときには、どうぞこの冊子を思い出し読み返してください。

がん相談支援センターは、あなたの「困った」「どうしよう？」の解決の糸口を一緒に考え、探していきます。この冊子を通し、多くの方に「がん相談支援センターって頼りになるところ」「一度相談してみよう」と思っていたことを願っています。そして、あなたの力になりたいと考えています。



〈この冊子を作成した経緯について〉

患者と主治医の会話のきっかけになることや、がん相談支援センターを知ってもらうこと、そして、患者と患者を助けたいと思っている人々との関係を「つなぐ」ことを目指して、この冊子を作りました。

国立研究開発法人国立がん研究センター
がん情報サービス編集委員会
都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会
情報提供・相談支援部会

がんと診断されたあなたに知ってほしいこと

——がん相談支援センターが力になります

2021年12月1日 第1版第1刷発行

編集 がん情報サービス編集委員会

発行 国立研究開発法人国立がん研究センター

がん対策研究所 がん情報提供部

〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1

本冊子の作成にご協力いただきました方々のお名前は、「がん情報サービス」の作成協力者（団体・個人）に掲載しております。また、お名前の掲載はしていませんが、その他にも多くの方々に協力いただきました。



「がん相談支援センター」について

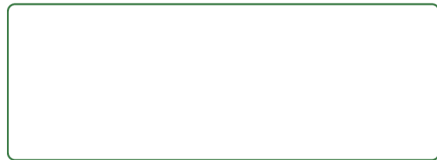
がん相談支援センターは、全国の国指定のがん診療連携拠点病院などに設置されている「がんの相談窓口」です。患者さんやご家族だけでなく、どなたでも無料で面談または電話によりご利用いただけます。

相談された内容がご本人の了解なしに、患者さんの担当医をはじめ、他の方に伝わることはありません。
わからないことや困ったことがあれば、お気軽にご相談ください。



がん相談支援センターやがん診療連携拠点病院、がんに関するより詳しい情報は、ウェブサイトをご覧ください。

がん情報サービス <https://ganjoho.jp>



国立がん研究センターでは、がんについてのさまざまな冊子を作成しています。

〈閲覧・
入手方法〉

▶ インターネットで

ウェブサイト「がん情報サービス」で、冊子ファイル (PDF) を閲覧したり、ダウンロードして印刷することができます。

がん情報サービス <https://ganjoho.jp>



▶ 病院で

全国のがん診療連携拠点病院などの「がん相談支援センター」で、閲覧・入手することができます。

▶ 閲覧や入手方法がわからないときは

「がん情報サービスサポートセンター」でご確認ください。

TEL. 0570-02-3410 ダイヤル TEL. 03-6706-7797

受付時間：平日10～15時（土・日・祝日、年末年始を除く）

*相談は無料ですが、通話料金はご利用される方のご負担となります。



つくるを変える
届けるを贈る

がん情報ギフト

国立がん研究センターでは、皆さまからのご寄付で「確かな・わかりやすい・役立つ」がん情報をまとめた冊子を作成し、全国の図書館などにお届けするキャンペーンを行っています。ぜひご協力ください。



がんと診断されて間もない人への 情報提供資料（冊子）

活用効果に関する調査 ご協力のお願い

厚生労働省 令和3年度厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
「がん患者の個々のニーズに応じた質の高い相談支援の提供に資する研究」
（20EA1015）
研究代表者：高山智子（国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部）
を資金源として実施します。

がん情報サービス ganjoho.jp

がんと診断された
あなたに
知ってほしいこと



1

情報提供・相談支援部会として、 “診断後間もない人向けの情報資料作成”に協力していく

がん情報編集委員会より都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会 情報提供相談支援部会
に対して、

- ・がんの冊子の一つとして、医師から相談支援センターの周知が図られる資料作成の提案

→都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会情報提供相談支援部会との**共同で資料作成**を行
うこととなった。

（第15回情報提供相談支援部会（2020年11月27日）において承認）

●「**主治医等から**相談支援センターについて説明する等、**診断初期の段階から相談支援センターの周知が図られる体制を整備すること**」（H30年7月31日 整備指針より）

●「**拠点病院のすべての主治医（チーム）が**、すべての患者に、十分な時間をかけて、複数回以上のインフォームド・コンセント、セカンドオピニオンを得るために必要な支援、アドバンス・ケア・プランニング（意思決定支援の対応プロセス）等を行うことを通じて、**病初期から治療終了に至るまで、患者にとって、患者自身の意思が尊重されていることを実感できる体制を拠点病院として確立することが必要である**」

（第10回 情報提供・相談支援部会 2018/6/12 整備指針において記載すべき事項に関する意見書 参考資料4-2
https://ganjoho.jp/med_pro/liaison_council/bukai/shiryo10.html）

2

地域がん診療連携拠点病院の指定要件より抜粋 p13

4 情報の収集提供体制

(1)がん相談支援センター

① 相談支援センターについて周知するため、以下の体制を整備すること。

ア 外来初診時等に**主治医等から**、がん患者及びその家族に対し、相談支援センターについて説明する等、**診断初期の段階から相談支援センターの周知が図られる体制を整備すること。**

イ **地域の医療機関に対し、相談支援センターに関する広報を行うこと。**また、地域の医療機関からの相談依頼があった場合に受け入れ可能な体制を整備することが望ましい。

3

情報提供・相談支援部会 検討チーム WGメンバー（敬称略）

（2021年1月14日開始時点）

出江 洋介	東京都立駒込病院	医師／患者サポートセンター長
清水 理恵子	国立がん研究センター中央病院	社会福祉士
松永 直子	国立がん研究センター中央病院	社会福祉士
山内 智香子	滋賀県立総合病院	医師／滋賀県相談支援部会長
岡村 理	滋賀県立総合病院	社会福祉士・精神保健福祉士
伊藤 由美子	兵庫県立がんセンター	看護師
森田 勝	国立病院機構九州がんセンター	医師／がん相談支援センター部長
増田 昌人	琉球大学病院がんセンター	医師／がんセンター長

4

作成のコンセプトと 医師による配布の意義について

情報提供・相談支援部会 検討チーム WGメンバー
山内 智香子
滋賀県立総合病院
医師／滋賀県相談支援部会長

5

告知から間もない時期の診察室

医師

- 様々な説明をしたいが、病状や今後の治療の説明だけで精一杯
- 病状や治療以外の説明には不得意なものも（医療福祉制度・就労・妊孕性温存など）

患者・家族

- 多くの説明を短期間に理解するのは困難
- すぐに今後の生活をイメージできない
- 幅広い疑問や心配事の適切な解決法をリサーチするのは困難

相談支援センターの
出番です！

しかし・・・

- 相談支援センターを知らない
- 何を相談したらいいのかわからない
- こんなつまらないことを聞いていいのかな？
- 相談料がかかるのかな？



6

冊子作成のコンセプト

とにかく「がん相談支援センター」を知ってもらう

- 寄り添うチームがいて何でも相談できる



患者に冊子を最も手に取ってもらいたい時期

- がんの告知直後～初回治療開始（初回入院するとき）頃まで



患者が冊子を手に取る場面

- 医師（医療者）から冊子を手渡される
- がん相談支援センターで冊子を手にとる
- 院内のリーフレットラックで冊子を手にとる
- 図書館などの公共機関のリーフレットラックで冊子を手にとる
- がん情報サービスWebサイトで目にする



7

冊子作成のコンセプト

冊子を手にとった時に想定される患者の状況

- 診断されて、動揺している（ことが多い）
- 治療や仕事、家族のことなど大切な選択や決断を迫られている（ことが多い）
- でも、まだ何も考えられない・・・



どうすれば手に取って読んでもえらるか？

- 最も信頼できる主治医や担当医療者から渡す（置いてあるだけでは目に入らない）
- 混乱・動揺している中で読んでもらえる工夫
 - わかりやすさ：用語の吟味
 - 安心感を与える見た目の柔らかさ：イラスト・色調
 - 相談支援センターでは様々な困りごとに対応していることを示す



8

冊子利用のメリット

医師（医療者）にとってのメリット

- ・伝えたいけれど十分に伝えられない情報を補完できる
 - > 標準治療について、セカンド・オピニオン（受けられること、しくみ）
 - > 妊孕性（治療を始める前に伝える必要がある情報）
 - > 就労支援（「仕事をすぐに辞めないで」）…等
- ・多職種で連携しやすくなる
 - > がん相談支援センターの紹介：困った時には、だれかに相談してほしい！そんな場として利用できる「がん相談支援センター」をいち早く紹介でき、多職種で連携し、患者や家族に必要な情報提供やサポートができる



メリットを実感してもらえれば
患者へ届けてくれる



冊子利用のメリット

患者にとってのメリット

- ・必要な情報を得ることができる
 - > 冊子内のQRコードを利用すれば、さらに詳しい情報が得られる
 - > 「がんと診断されたあなたに知ってほしいこと」
+
「地域のがん情報」「がんの冊子」「わたしの療養手帳」も併せて手に取ることで、それぞれの状況に応じ必要な情報が得られる



メリットを実感してもらえれば
医療者への信頼につながる



「本冊子」の周知に関わる全体の流れと このたびのご協力をお願い内容

・冊子査読のご協力をいただいた皆様、誠にありがとうございました。

■「本冊子」の活用効果に関する調査

■ご協力をお願い内容

- 冊子配布の有用性と活用に関する調査を行います。（厚労科研究研究班協力のもと）
- 2022年3月頃～5月頃
- I “医師”への周知と活用に関するアンケート・インタビュー調査（個々の医師を対象）
- II 施設内での「本冊子の効果的な周知と活用方法」に関する調査（相談支援センターを対象）

→ 調査結果は、情報提供・相談支援部会等を通して、ご報告させていただきます。

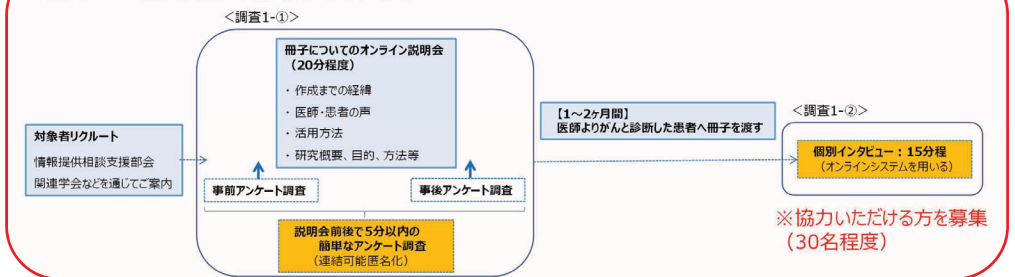
■「本冊子」の周知・配布の開始

■スケジュール

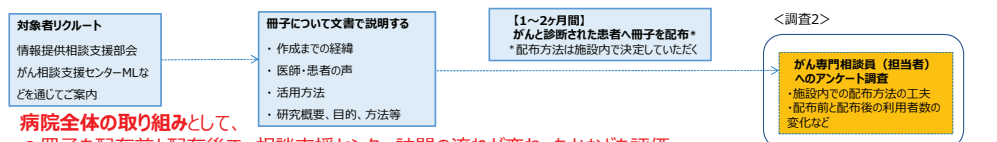
- 2022年2月：「がん情報サービス」上へ公開
 - がん情報サービス HOME> 診断と治療> がんと診断されたあなたに知ってほしいこと
 - 施設内への紹介用資材（PPT）も国拠点病院サポートページに掲載予定
- 2022年3月初旬：冊子発注システムにより「購入冊子注文開始」
 - →各施設への初回納品（5月半ば）

研究のアウトライン（全体）

研究Ⅰ：医師個人を対象とした調査



研究Ⅱ：がん相談支援センターを対象とした調査



- 病院全体の取り組みとして、
- 冊子を配布前と配布後で、相談支援センター訪問の流れが変わったかなどを評価
 - 周知方法を共有

「本冊子」の活用効果に関する調査

- 医師の先生方が、実際にこの「冊子」を使ってみて、

“使ってよかった！”と実感できることが、

何よりも大切だと思っております。

- そうなるためには、何ができるのか

インタビューでお伺いしたいこと（15分程度の予定です）

- 冊子を渡した患者数
- 冊子利用による診療時間への影響は？（増えた、変わらない、減ったなど）
- 冊子利用により よかったと思ったことは？
（医師にとって、医療チームにとって、患者さんにとって）
- 医師の負担を軽減するための工夫は？ どんなことがあればいいでしょう？
- 他の先生方へのメッセージなど

ぜひ、使ってみたご感想をお聞かせください！

13

14

本日は、お忙しい中また遅い時間に、
貴重なお時間をありがとうございました。

質問がございましたら、
手を挙げてお知らせください。

15

「診断されて間もない人への情報提供資材」の評価と活用に関するアンケート

質問項目	事前調査		事後調査		
	回答者		回答者		
	度数	構成比 (%)	度数	構成比 (%)	
	44	100.0	28	100.0	
◆ 本アンケート調査への協力について	1. 同意する	44	100.0	25	89.3
	2. 同意しない	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
1. オンライン説明会をお知りになったきっかけについて、お尋ねします。					
今回のオンライン説明会には、どのような経緯で参加することになりましたか。この説明会を知ったきっかけ（経緯）について教えてください。	1. 院内での一斉連絡メールから	17	38.6	6	24.0
	2. 院外の関係者ネットワークの連絡メールから	12	27.3	6	24.0
	3. 所属診療科の連絡メールから	4	9.1	4	16.0
	4. 同僚の医師からのメールや声かけで	10	22.7	7	28.0
	5. その他	2	4.5	2	8.0
2. ご所属の医療機関やあなたについて、お尋ねします。					
1) 現在ご所属の医療機関（主に勤務されている医療機関）を、以下よりお選びください。	1. 大学病院	23	52.3	14	50.0
	2. がん専門病院	13	29.5	7	25.0
	3. 総合病院	8	18.2	4	14.3
	4. その他	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
2) 現在ご所属の医療機関（主に勤務されている医療機関）は、がんの領域で厚生労働省や都道府県から指定を受けている病院ですか。	1. （国指定）都道府県がん診療連携拠点病院	35	79.5	22	78.6
	2. （国指定）地域がん診療連携拠点病院、その他のがん診療連携拠点病院	8	18.2	3	10.7
	3. （都道府県独自の指定）がん拠点病院やがん関連の協力病院など	1	2.3	0	0.0
	4. わからない	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
3) 現在ご所属の医療機関（主に勤務されている医療機関）での、あなたの職位または立場を教えてください。	1. 施設管理者（院長・副院長など）	5	11.4	3	10.7
	2. 部門管理者（部長/科長・医長など）	21	47.7	11	39.3
	3. 医師	18	40.9	11	39.3
	4. その他	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
4) 臨床経験年数を教えてください。あてはまる数字をご入力ください。	10年以下	2	4.5	2	7.1
	11-15年	6	13.6	3	10.7
	16-20年	9	20.5	4	14.3
	21-25年	9	20.5	7	25.0
	26-30年	9	20.5	5	17.9
	31-37年	9	20.5	4	14.3
	無回答	0	0.0	3	10.7
5) あなたの診療科のご専門領域を教えてください。	1. 外科系	19	43.2	11	39.3
	2. 内科系	24	54.5	13	46.4
	3. その他	1	2.3	1	3.6
	対象外	0	0.0	3	10.7
6) あなたの年代を教えてください。1つをチェックしてください。	1. 20代	1	2.3	1	3.6
	2. 30代	6	13.6	4	14.3
	3. 40代	15	34.1	8	28.6
	4. 50代	15	34.1	10	35.7
	5. 60代	7	15.9	2	7.1
	6. 70代以上	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
7) あなたの性別を教えてください。	1. 男性	41	93.2	23	82.1
	2. 女性	3	6.8	2	7.1
	3. 無回答	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
3. あなたの診療について、お尋ねします。					
1) あなたが一月あたり外来診療で接する患者さんは何人くらいで	10人以下	9	20.5	6	21.4
	11-20人	13	29.5	6	21.4
	21-30人	9	20.5	6	21.4
	31-80人	13	29.5	7	25.0
	無回答	0	0.0	3	10.7
2) あなたが一月あたり外来診療で接する患者さんのうち、治療を開始する前のがん患者さんは何人くらいですか。	1人	1	2.3	1	3.6
	2人	2	4.5	1	3.6
	3人	6	13.6	3	10.7
	4人	5	11.4	1	3.6
	5人	8	18.2	5	17.9
	8人	2	4.5	2	7.1
	10人	7	15.9	4	14.3
	11-20人	6	13.6	4	14.3
	21-60人	7	15.9	4	14.3
	無回答	0	0.0	3	10.7
3) 現在、がんの診療に携わっていますか。	1. はい	44	100.0	25	89.3
	2. いいえ	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7
4) がんと診断されて間もない患者さんや家族などと直接話すことや、説明する機会がありますか。	1. はい	44	100.0	25	89.3
	2. いいえ	0	0.0	0	0.0
	対象外	0	0.0	3	10.7

4. ご所属の医療機関の「がん相談支援センター」について、お尋ねします。					
1) ご所属の医療機関内の「がん相談支援センター」の場所を知っていますか。	1. はい	41	93.2	23	82.1
	2. いいえ	3	6.8	2	7.1
	対象外	0	0.0	3	10.7
2) がん診療連携拠点病院内にある「がん相談支援センター」の対応内容をご存知ですか。	1. 知っている・利用したことがある	38	86.4	21	75.0
	2. 知らない・利用したことがない・わからない	6	13.6	4	14.3
	対象外	0	0.0	3	10.7
2)で“1.知っている・利用したことがある”と回答した方へ 「がん相談支援センター」での対応のうち、既知っているもの全てにチェックしてください。	1. その病院にかかっている・利用できているがん相談窓口である	29	76.3	20	76.9
	2. 患者だけでなく、家族や友人など誰でも利用できる	37	97.4	24	92.3
	3. 安心して利用できるよう相談者の相談内容を、本人の了解なしに主治医をはじめ他の人に伝えることはない	34	89.5	21	80.8
	4. 相談者（患者や家族など）の不安などの心理的な支援を行う	38	100.0	24	92.3
	5. 相談者が医師の話が十分にわからなかったときの理解を助ける／医師が行った説明の補完をする	37	97.4	23	88.5
	6. 相談者に必要な情報や支援を探す手伝いをする	38	100.0	24	92.3
	7. 相談者の医療費や使える医療制度の説明をする	38	100.0	24	92.3
	8. 相談者の悩みや困りごとに応じて、必要な支援やサービスを提案する	38	100.0	24	92.3
	9. 相談者の悩みや困りごとに応じて、対応できる院内や院外の窓口へ橋渡しする	38	100.0	24	92.3
	10. 転院先や退院後の療養先を探す	30	78.9	18	69.2
	11. 相談者が医師に聞きたいことを相談者と一緒に整理する	33	86.8	21	80.8
3) これまでに患者さんや家族などへ案内する時など、医師ご自身として「がん相談支援センター」を利用されたことがありますか。	1. 利用したことがある	36	81.8	20	71.4
	2. 利用したことがない	7	15.9	5	17.9
	3. 「がん相談支援センター」のことは知らない	1	2.3	0	0.0
3)で“1.利用したことがある”と回答した方へ 「がん相談支援センター」について、患者さんや家族などへ案内する時など、医師ご自身として利用している機能について、あてはまるもの全てにチェックしてください。	1. その病院にかかっている・利用できているがん相談窓口である	12	33.3	6	30.0
	2. 患者だけでなく、家族や友人など誰でも利用できる	17	47.2	10	50.0
	3. 安心して利用できるよう相談者の相談内容を、本人の了解なしに主治医をはじめ他の人に伝えることはない	13	36.1	6	30.0
	4. 相談者（患者や家族など）の不安などの心理的な支援を行う	25	69.4	14	70.0
	5. 相談者が医師の話が十分にわからなかったときの理解を助ける／医師が行った説明の補完をする	21	58.3	9	45.0
	6. 相談者に必要な情報や支援を探す手伝いをする	30	83.3	17	85.0
	7. 相談者の医療費や使える医療制度の説明をする	32	88.9	20	100.0
	8. 相談者の悩みや困りごとに応じて、必要な支援やサービスを提案する	30	83.3	17	85.0
	9. 相談者の悩みや困りごとに応じて、対応できる院内や院外の窓口へ橋渡しする	26	72.2	14	70.0
	10. 転院先や退院後の療養先を探す	26	72.2	14	70.0
	11. 相談者が医師に聞きたいことを相談者と一緒に整理する	19	52.8	10	50.0
4) 今後、患者さんや家族などへ案内する時など、医師ご自身として「がん相談支援センター」を利用したい機能はありますか。	1. 利用したい	38	86.4	21	75.0
	2. 利用したい機能はない	1	2.3	1	3.6
	3. わからない	5	11.4	3	10.7
4)で“1.利用したい”と回答した方へ 「がん相談支援センター」について、今後、患者さんや家族などへの案内など、医師ご自身として利用したい機能について、あてはまるもの全てにチェックしてください。	1. その病院にかかっている・利用できているがん相談窓口である	27	73.0	15	75.0
	2. 患者だけでなく、家族や友人など誰でも利用できる	26	70.3	13	65.0
	3. 安心して利用できるよう相談者の相談内容を、本人の了解なしに主治医をはじめ他の人に伝えることはない	24	64.9	12	60.0
	4. 相談者（患者や家族など）の不安などの心理的な支援を行う	29	78.4	15	75.0
	5. 相談者が医師の話が十分にわからなかったときの理解を助ける／医師が行った説明の補完をする	30	81.1	15	75.0
	6. 相談者に必要な情報や支援を探す手伝いをする	31	83.8	16	80.0
	7. 相談者の医療費や使える医療制度の説明をする	33	89.2	16	80.0
	8. 相談者の悩みや困りごとに応じて、必要な支援やサービスを提案する	32	86.5	17	85.0
	9. 相談者の悩みや困りごとに応じて、対応できる院内や院外の窓口へ橋渡しする	31	83.8	17	85.0
	10. 転院先や退院後の療養先を探す	32	86.5	17	85.0
	11. 相談者が医師に聞きたいことを相談者と一緒に整理する	29	78.4	15	75.0
5. 普段の診療における新たにがんと診断された患者さんへの説明状況について、お尋ねします。					
1) 他の医療機関のセカンドオピニオンを受けられることについて説明すること。	1. ほとんどの患者に説明できていない	9	20.5	6	21.4
	2. 2, 3割の患者に説明できている	13	29.5	8	28.6
	3. 約5割の患者に説明できている	3	6.8	2	7.1
	4. 7, 8割の患者に説明できている	12	27.3	6	21.4
	5. すべての患者に説明できている	7	15.9	3	10.7
	対象外	0	0.0	3	10.7
2) 治療が始まる前に、妊孕性温存できるか否か、必要な対応について説明すること。	1. ほとんどの患者に説明できていない	22	50.0	12	42.9
	2. 2, 3割の患者に説明できている	10	22.7	7	25.0
	3. 約5割の患者に説明できている	1	2.3	0	0.0
	4. 7, 8割の患者に説明できている	5	11.4	3	10.7
	5. すべての患者に説明できている	6	13.6	3	10.7
	対象外	0	0.0	3	10.7
3) がんと診断されても仕事を継続できることなど、就労について説明すること。	1. ほとんどの患者に説明できていない	8	18.2	5	17.9
	2. 2, 3割の患者に説明できている	8	18.2	5	17.9
	3. 約5割の患者に説明できている	6	13.6	2	7.1
	4. 7, 8割の患者に説明できている	14	31.8	10	35.7
	5. すべての患者に説明できている	8	18.2	3	10.7
	対象外	0	0.0	3	10.7
4) がん相談支援センターがあり、いつでも相談できることを説明すること。	1. ほとんどの患者に説明できていない	9	20.5	6	21.4
	2. 2, 3割の患者に説明できている	12	27.3	7	25.0
	3. 約5割の患者に説明できている	5	11.4	2	7.1
	4. 7, 8割の患者に説明できている	13	29.5	8	28.6
	5. すべての患者に説明できている	5	11.4	2	7.1
	対象外	0	0.0	3	10.7

質問項目	事後調査	
	回答者	
	度数	構成比 (%)
	28	100.0
医師がこの冊子を直接手渡すことで、医師の手渡し時間や説明などが必要になるかもしれません。また一方で、医師からすべてを説明する時間的な負担が軽減することが期待できるかもしれません。総合的に見て、以下の観点についてどのように感じられますか。現時点においての率直な印象をお聞かせください。		
(1) この冊子を手渡すことで、医師の時間的な負担の度合いは	1. とても大きくなる	1 3.6
	2. 大きくなる	8 28.6
	3. 変わらない	15 53.6
	4. 小さくなる	4 14.3
	5. とても小さくなる	0 0.0
	対象外	0 0.0
(2) この冊子を手渡すことで、医師の心理的な負担の度合いは	1. とても大きくなる	1 3.6
	2. 大きくなる	3 10.7
	3. 変わらない	9 32.1
	4. 小さくなる	15 53.6
	5. とても小さくなる	0 0.0
	対象外	0 0.0
(3) この冊子を手渡すことで、医師と患者との関係は	1. とても良好になる	3 10.7
	2. 良好になる	15 53.6
	3. 変わらない	10 35.7
	4. 不良になる	0 0.0
	5. とても不良になる	0 0.0
	対象外	0 0.0
(4) この冊子を手渡すことで、医師や医療チーム、医療機関に対する患者の信頼度は	1. とても大きくなる	3 10.7
	2. 大きくなる	22 78.6
	3. 変わらない	3 10.7
	4. 低下する	0 0.0
	5. とても低下する	0 0.0
	対象外	0 0.0
この冊子の利用意向についておたずねします。率直な感想をお聞かせください。		
(1) この冊子をご自身の診療で利用したい（患者に直接手渡したい）と思う	1. とてもそう思う	12 42.9
	2. そう思う	13 46.4
	3. どちらともいえない	3 10.7
	4. そう思わない	0 0.0
	5. まったくそう思わない	0 0.0
	対象外	0 0.0
(2) この冊子の存在と利用の仕方を、他の医師に知らせたいと思う	1. とてもそう思う	12 42.9
	2. そう思う	14 50.0
	3. どちらともいえない	2 7.1
	4. そう思わない	0 0.0
	5. まったくそう思わない	0 0.0
	対象外	0 0.0